

キリスト教の神か異教の神か？ *Beowulf* 1.27 の '*Frean wære*' の解釈をめぐって

横田比古乃

1. はじめに¹

Beowulf の冒頭で、シュルディングの王・シェーフの子シュルドの栄光と功績が語られ、その後、その最期が語られる。

Him ða Scyld gewat to gescæphwile
 felahror feran on *Frean wære*.
 [Then, at the fated hour, Scyld, a man of most valorous,
 departed, to go into *Frean wære*.]²

(ll.26-27)

ここに続く箇所ではシュルド王の葬儀の様子が詳しく描写されている。シュルド王の亡骸は家臣らによって岸边へと運ばれ、船の胸の帆柱のそばに横たえられる。船は武器・甲冑・刀剣・胴甲など、遠方から集められた数々の財宝で美しく飾られ、王の胸の上には宝物が置かれる。そして、家臣らは王の頭上高く金色の幟を立て、潮が遺骸を運ぶにまかせて、亡骸を海へと送るのである。ここで語られているのは、明らかに異教の葬送形式である船葬についてである。

しかし、上記引用のシュルド王の死に関する箇所の *Frean wære* に関しては、異教の神と解釈する立場 (Bradley 他) とキリスト教の神と解釈する立場 (Schneider) とに分かれる様である。

では、27 行目の *Frean wære* は何を示しているのだろうか？ 異教の神か、それとも、キ

¹ *Beowulf* という作品は、異教信仰からキリスト教信仰への宗教的・社会的変遷、口承文学から文字の文学 (写本など) への文化的変遷など様々な時代的條件が混ざり合い、重なり合った環境の中で形成され、それ故に、口承されていた *Beowulf* の物語から写本 *Beowulf* にいたるまでには、多くの変化を遂げてきた可能性がある。よって本稿では、写本製作者を著者と見なして論じる。また、Klaeber の “The Christian elements are almost without exception so deeply ingrained in the very fabric of the poem that they cannot be explained away as the work of a reviser or later interpolator.” (p.104) という考えに従って、キリスト教的要素は加筆改正ではないと考えて論じる。キリスト教的脚色 (The Christian coloring) については、Klaeber (1975), pp.102-05 を参照。

² テキストは Jack 版を使用。訳は Hall (1950) を参照し、本発表の論点となる '*Frean wære*' や '*gastbona*' については古英語のままとした。斜体は筆者。

リスト教の神であろうか？本稿では、175行目からのシュルドの人々の異教信仰の描写との整合性を考察しながら、27行目の *Frean wære* の解釈を検討してみたい。

2. *Frea* の定義と *Beowulf* 1.27 の *Frean wære* の先行研究

まず、OE *frea* の定義を見ていくと、Hall (2000) は “ruler, lord, king, master: the Lord, Christ, God: husband”³ の意味を挙げ、Bosworth & Toller (以下 *BT* と略記) は、“*m. A lord, master, the Lord; dōmīnus*”⁴ として、さらに語源について次のように記述している。

O.Sax. fráho, fróho, fróio, fró, *m.*: *O.H.Ger.* fró, *m. dōmīnus*: *Goth.* Frauya, *m. lord*:
Icel. Freyr, *m. name of the god Freyr*.⁵

Klaeber もまた、glossary に *frea* 相当語として “Go. frauja, ON. Freyr” を挙げている。⁶ Schneider は *frea* の語源について以下のように述べている。

Frēa means “the First One”. It derives from IE. **prōuo-*, **perəuō* with cognates in Latin *prōnus* “slanting forward”, *prīmus* “the first one”, Lithuanian *primas*, Sanskrit *pūrva*, Old Persian *paruva* “the earlier one”.⁷

以上のことから、OE *frea* は “lord” や “the Lord” を意味し、Icel. *Freyr* “name of the god Freyr” のような異教神を示す語と同根であることがわかる。

Beowulf において *frea* が使用されるのは「神」と「人間の王」に対してである。神に対して使用される例は、*frea* “the Lord” (27, 2794 行目) の2箇所と、複合語 *Lif-frea* “Lord of life (God)” (16 行目) の1箇所、計3箇所である。その他の多くの箇所では、*frea* は人間の王に対して（時には「夫」や「主人」の意味で）使われている (*frea* “lord, king”, 271, 291, 348, 351, 359, 500, 1166, 1319, 1680, 2285, 2537, 2662, 2853, 3002, 3107; “consort”, 641; *agend-frea* “owner, lord”, 1883; *frea-dryhten* “lord”, 796; *frea-wine* “(friend and) lord”, 2357, 2429, 2438)。⁸

先行研究を見ると、Hall (1950) と Bradley は 27 行目の *Frean wære* を “into the keeping

³ Hall (2000), “frea”

⁴ *BT*, “frea”

⁵ *Ibid.*

⁶ Klaeber (1941), p.334

⁷ Schneider, p.13

⁸ *Frea* とその複合語の出現箇所については Klaeber (1941) の glossary, p.298, p.334, p.368 と *A Concordance to Beowulf* 参照。

of the Lord”とし、⁹ Jack も *Frea* “Lord”; *wære* “protection” と解釈している。¹⁰ Klaeber (1941) も glossary で 27 行目の *frean* を “the Lord” の意味で挙げている。¹¹ すなわち、彼らはここでの *frean* を「キリスト教の神」と解釈している。

一方、Schneider は、27 行目の “Scyld went into the protection (keeping) of the Lord” という解釈は、50 から 52 行目の “They (i.e. the survivors) did not know who received the freight (i.e. the corpse on the ship)” という見解と矛盾することを指摘し、

Although *Frēa* is a word used later on by Christian Anglo-Saxons to designate the Christian God, the same word in pagan times may have meant a pagan god.¹²

という考えに基づいて、*wære* を *wær* “water, flood”、*Frea* を “the Primary Being, the First One” と見なし、*Frean wære* を “into the water of *Frēa*” と解釈している。Schneider は次のように説明している。

“The water of *Frēa*” is the water created by the sacrifice of the Primary Being of the pagan Germanic peoples. You may have heard about this myth of the Primary Being, a giant, comprising the whole world (heaven and earth) and being the architect of the world. This primary giant sacrificed himself according to an IE./Germ. myth. The parts of his body became parts of the world: his cranium became heaven, his brain became clouds, his blood became the ocean, his bones became the mountains, and so forth.¹³

以上のように Schneider は、27 行目の *frean* を「異教の神」と解釈している。

したがって 27 行目の *Frean wære* の解釈は、Bradley、Jack、Klaeber による「キリスト教の神の保護のもとへ」という解釈と、Schneider による「異教の神の流れの中へ」という解釈の二通りに分かれる。

ここで、*Beowulf* の中で 27 行目の *Frean wære* を含む船葬の場面以外に、シュルドの人々の宗教について描写されている場面を検討したい。

以下の場面では、グレンデルの悪行に頭を悩ませたシュルドの人々による祈りの様子が描写されている。

⁹ Bradley, p.412

¹⁰ Jack, p.29

¹¹ Klaeber(1941), p.334

¹² Schneider, p.13

¹³ *Ibid.*

< *Beowulf* l.175ff >

Hwilm hie geheton æt hærgtrafum

wigweorpunga, wordum bædon

þæt him *gastbona* geoce gefremede

wið þeodþreaum. Swylc wæs þeaw hyra,

hæþenra hyht;

[Sometimes they vowed sacrifices at the tabernacles of idols, –
prayed aloud that *gastbona* (=the destroyer of souls) would
provide them help against the distress of the people. Such was
their custom, – the hope of the heathen]

(ll.175-79a)

時には人々は異教の神殿にて (l.175 *æt hærgtrafum*) 偶像崇拝を誓い (ll.175-76 *geheton... wigweorpunga*)、*gastbona*(l.177) に向かって民の災厄から救ってくれるよう声でもって祈るのであった。彼らの習慣、異教徒の望み (l.179 *hæþenra hyht*) はそのようなものであった。

この場面では、大きな苦しみ (l.170 *wræc micel*) と心の悲しみ (l.171 *modes brecca*) に直面した際に、シュルドの人々が異教の神に救いを求める様子が描かれているが、ここで彼らの偶像崇拝の対象となり、救いを求めて祈願されているのは *gastbona* である。*Gastbona* は、*gast* + *bona* の2つの要素で構成され、“soul-slayer, devil”を意味する。¹⁴ Hall (2000) によると *Gast* は “breath: soul, spirit, life: good or bad spirit, angel, demon: Holy Ghost: man, human being. [‘ghost’]”を意味する。¹⁵ *Gast* は BT によると “I . the breath II . the spirit, soul, ghost”を意味する。¹⁶ Klaeber は “ghost, spirit, sprite”に加え “demon” という語義も挙げている。¹⁷ この *gast* という言葉は *Beowulf* l.102, l. 133 などではグレンデル（悪行を働く悪者として描かれている怪物）に対して使用されるが、BT によると *Gast Helm* “the protector of spirits, God” (Cd.86)¹⁸ のように良いイメージをもつ言葉との組み合わせで使用されることもある。一方、*bana*(=*bona*) “slayer, murderer”¹⁹ は、例えば 2082 行目では従者を食らったグレンデルに対して使用されている。よって *gastbona* “soul-slayer, devil” は、悪いイメージをもつ言葉であると考えられるので、175 行目からのシュルドの人々の信

¹⁴ Klaeber (1941), p.338

¹⁵ Hall (2000), p.148

¹⁶ BT, “gast”

¹⁷ Klaeber (1941), p.338

¹⁸ BT, “gast”

¹⁹ Klaeber (1941), p.301

仰対象である異教神は悪を表す言葉で表現され、彼らの異教信仰の様子は悪いイメージで描かれていると言える。

それでは、27 行目の *Frean wære* の解釈と、175 行目からのグレンデルの悪行に頭を悩ませたシュルディング人の祈りの描写との整合性はどのようなのであろうか？

まず、27 行目の *Frean wære* を異教の神、つまり “into the water of *Frea*” と考えた場合、27 行目の *Frean wære* と 177 行目の *gastbona* は同じ異教神を示すことになり、この二箇所の場面描写の間に次のような矛盾が生じる。27 行目の *Frean wære* が登場する前の箇所では、民のためにシュルドの子ベオウルフをこの世に送り賜うた神 (1.13 *God*) の様子が *Liffrea* “the Lord of life”(1.16)、*wuldres Wealdend* “the Ruler of glory”(1.17) のように賞賛的に表現され (11.12-17)、その次の場面で 27 行目の *Frean wære* が登場する。一方、175 行目からの場面では、シュルディングの人々が祈願している異教神に対して *gastbona* “soul-slayer” という悪いイメージの表現が使われている。よってこの二つの場面では、同じ異教神に対して相反する表現が使われているという矛盾が生じる。

次に、27 行目の *Frean wære* をキリスト教の神、つまり “into the keeping of the Lord” と考えた場合、27 行目の *Frean wære* と 177 行目の *gastbona* “soul-slayer” (異教神を示す) とは同一の神を示さないで、この二箇所の場面描写に矛盾は生じない。

しかし、27 行目の *Frean wære* をキリスト教の神と考えた場合、28 行目以降に描かれている葬儀形式が異教的なものであるもので、亡くなったシュルド王の葬儀形式が異教的なもので、シュルド王の召される先がキリスト教の神であるという一見矛盾した解釈となってしまう。次に 1.175ff. の先行研究を検討してみる。

Jack も、175 から 183 行目の描写が他の箇所のデーン人の描写と外見上矛盾していること（つまり、異教的描写とキリスト教的描写の矛盾）を指摘し、次のように述べている。

There is a seeming inconsistency between lines 175-83 and the portrayal of the Danes elsewhere in the poem. Here, as well as being described as performing heathen practices, the Danes are said to be ignorant of God and unable to praise *heofena Helm* ‘the Protector of the heavens’ (180b-3a). But lines 90-8 have told of a song performed in Heorot which recounts the creation of the world by the Almighty, in phrases reminiscent of the opening chapter of Genesis; and Hrothgar’s speeches make frequent reference to God (e.g. 381-4, 928-31, 939-42).²⁰

175 行目からの場面ではデーン人たちの異教的習慣を描くと同時に彼らが神を知らなかった

²⁰ Jack, p.39

としているが、90-98行目の場面ではヘオロット城で全能の神による天地創造が語られており、フロースガールの話しはしばしば神に言及しているというのである。

Jack はさらに、フロースガールが一神教信者であることとキリスト教の関係について次のように述べている。

Though not a Christian, Hrothgar is a monotheist whose religious understanding is not at odds with Christianity. The poet may perhaps have intended a distinction between Hrothgar and a strongly pagan prouþ among the Danes, as Tolkien held . . . but it is more probable, as Irving concludes . . . , that the readiness of the Danes to turn to heathen practices reflects their despair in the face of Grendel's assaults.²¹

上記で Jack は、一神教信者であるフロースガールの宗教的理解がキリスト教信仰から外れたものではないということを指摘し、詩人がフロースガールとデーン人の熱烈な異教的グループの区別を意図していたのかもしれないという可能性よりも、デーン人がグレンデルの襲撃に直面した絶望のために異教的習慣へ戻った可能性が高いと結論付けている。

さらにはっきりと、この箇所にはキリスト教的視点が見られるとしているのは Klaeber である。彼は、デーン人たちの異教的習慣に加え、著者による明らかにキリスト教的なコメントが見られることを指摘している。

A passage remarkable both for the reference to the heathen practice of the Danes and the author's pointed Christian comment. Since Hrothgar is throughout depicted as a good Christian, the Danes' supplication to a heathen deity (termed gastbona, 'devil', cf. *Angl.* xxxv 137) might conceivably indicate that in time of distress they returned to their former ways - as was done repeatedly in England . . . But it is at least equally possible that the author, having in mind the conditions existing among the Danes of the sixth century . . . at this point, failed to live up to his own modernized representation of them.²²

Klaeber は、フロースガールは終始良いキリスト教徒として描かれているから、デーン人たちの異教神への祈願は、悩んでいる時に、彼らがイングランドで繰り返し行なわれていたような以前の習慣へ戻ってしまうことを示していると考えられるだろうと述べている。

²¹ *Ibid.*

²² Klaeber (1941), 135

Klaeber と Jack の先行研究をまとめると、彼らに共通する見解は、デーン人たちが悩んでいる時に異教神への祈願という以前の習慣へ戻ってしまう可能性があるということである。そして Klaeber はフロスガールが一神教信者であることを指摘し、Jack は著者による明らかにキリスト教的なコメント（キリスト教的異教批判の視点と言えるのではないか？）について指摘している。

続いて、27 行目の *Freaen wære* をキリスト教の神と考えた場合の矛盾点や、177 行目からの描写と他の場面との外見上の矛盾点を解決するために、27 行目の *Freaen wære* と 177 行目からの偶像崇拜の場面を、中世の宗教的背景に照らし合わせて考察する。

3. 中世の宗教的背景

Beowulf という物語はアングロ・サクソン人がキリスト教に接する以前に口承されていたが、古英詩 *Beowulf* は 8～9 世紀に Britain 島で成立し²³、11 世紀頃に現存する写本²⁴に書き写されたとされている。*Beowulf* は、中世の異教からキリスト教への改宗過程において聖職者によって書き記されるという「時代のコンテクスト」に置かれた。そのため、随所にキリスト教的記述が見られる。また、当時書物として書き記すという行為は、羊皮紙など材料が高価であったため、書かれた内容は重要な意味を持つ事柄であったと考えられる。²⁵

では *Beowulf* 写本は何のために作られたのか？一つの可能性として、キリスト教の教義を異教徒たちに教える教本（道具）として作られたことが挙げられる。

ここで当時の宗教的背景がどのようなになっていたのかを見ていきたい。以下はルドー・ミリスの『異教的中世』からの引用である。

・・・異教徒たちは武力に訴えてまでも自分たちの信仰を守ったり、自らの宗教思想の構造的欠陥ともいべき厄介な矛盾点を整合させるためにキリスト教のモデルを逆利用したりしている・・・さらに、異教徒の改宗をスムーズに進めてゆくために、キリスト教会は異教信仰と数かぎりない妥協をも余儀なくされた。しかし、これらの

²³ 忍足、pp.321-23 を参照。

²⁴ 現存する唯一の写本は MS. British Library Cotton Vitellius A XV である。Klaeber (1941), pp.xcv-xciv と忍足、pp.319-20 参照。

²⁵ ミリス、pp.20-21 には以下のように述べられている。

・・・教会そのものの内部においては、文字は主として高位聖職者の領分に属するものであり、彼らの間で行われる連絡は、その地位なるがゆえにもっともキリスト教的性格を帯びたものであった。

当然、著作活動は修道院においても盛んに行われていたことである。修道院制は超俗的な性質のために、神について瞑想するという傾向が強かった。しかし、それでも当時は著作活動は非常に特殊な行為であり、このような状態は十二世紀まで続いたのである。文字で書き記すことは、当時の人の目で見れば書き残すという努力に値する内容をもつ事柄にだけ限定された行為であった。また、文章に用いられる材料や用具は非常に高価であったため、著作活動そのものがそもそも稀なことだった。反面、このことは書かれた内容－神にかかわること、すなわち崇高で規範となるようなすべての事柄－が悠久に残る価値をもっていたということでもある。

妥協のすべてが、実際に布教活動に携わっていた宣教師たちだけが行ったというわけではない。

高位聖職者たちでさえこのような異教信仰との妥協政策は勧めていたことであり、教皇グレゴリウス一世もそのような聖職者の一人であった。彼は聖アウグスティヌスがイングランドで布教活動に携わっているときに、破壊するのは異教徒の偶像だけにせよと忠告をしている。また、異教徒の神殿そのものは温存してキリスト教の教会として再聖別化し、彼らが馴染んできた崇拜の場所に彼らを引きつけるために再利用をせよとも忠告している。

このような改宗政策を進めていた時期は、とりわけ種々の宗教が錯綜していた時代であった。そして、この興味深いキリスト教化のプロセスを通して初めて、最終的にキリスト教が勝利を得ることになるのである。²⁶

中世という時代は、異教が生き残りをかけてキリスト教を利用したその一方で、キリスト教が信仰を浸透させるために異教と妥協し、また、異教を利用した時代であった。さらに同著の中で、キリスト教が妥協し、受け入れた異教的要素について次のように述べられている。

唯一、寛大な譲歩がなされたのは彼ら（異教徒）の崇拜の外面的形態に関してのみであった。というのは、異教徒時代の古い崇拜の型枠は温存して、その中に新しい中身が入れられたからである。

.....

このように、異教の慣習は、キリスト教の教義に合うように変えられることによって初めて存続することができたということは意味深いことである。その結果、「キリスト教と異教の混合形態が発達することになり、そこでは異教徒はもはや外面的形態を提供するだけにとどまり、その中身はキリスト教的になっていたのである」。²⁷

このような「時代のコンテキスト」に照らし合わせてみると、*Beowulf* 27行目を含む場面では、「船葬」という異教的外面的形態を温存して、「キリスト教の神の保護のもとに召される」というキリスト教的中身が表現されていると言える。つまり、*Freaen wære* は、「著者のキリスト教的視点を通して見た神、キリスト教の神の保護のもとへ」と解釈できる。したがって、亡くなったシュルド王の葬儀形式が異教的なもので、シュルド王の召される先がキリスト教の神であるという外見上の矛盾は解決する。

²⁶ ミリス、p.32。以下引用の下線は筆者。

²⁷ *Ibid.* pp.34-35。「 」はミリスによる A.D. Haenes, 'Rapport sur "La religion dans les manuels d'histoire"', in: *La religion dans les manuels d'histoire*, Strasbourg, 1974, p.110 からの引用。() 内の補足は筆者。

キリスト教が異教の外面的形態を利用したさらなる例がある。フルトゥルイ信仰という一神教信仰である。『異教的中世』では、ゲルマン人が自分たちの宗教を修正して強化し、キリスト教から守るための例として挙げられている。²⁸

・・・普遍的な宗教システムとしての異教信仰が崩壊に瀕していたことを示す証拠がある。たとえば、「フルトゥルイ信仰」である。これは「拝一神論 (henotheism)」の一形態で、信徒は万神バルテノン殿の中から一つの神—たとえば、トール、フレイ、オーディンなど—を選び、それを絶対的信頼のおける友、すなわちフルトゥルイとして崇める。それに対して、選ばれた神はその見返りとしてまさかのときに信徒を助けるのである。そのほかの神々は否定も排除もされるわけではないが、フルトゥルイを選んでしまった信徒たちからはほとんど崇拝を受けることはなかった。この点においても、「一つの神」を信仰するキリスト教徒の神との個人的な関係が触媒として作用していた可能性は高いといえる。

・・・普遍的宗教システムとしての異教信仰は蹟いたが、どのような種類の文化変容にも共通する自然の法則が意味していることは、文化の本質的内容までが完全に失われてしまうことはないということである。したがって、もともとの文化の要素がキリスト教と平行して存続する場合もあれば、キリスト教に改宗してからの数世紀間、キリスト教を無視して存続し続ける異教的要素もあったのである。²⁹

Klaeber はフロースガールが一神教信者であることを指摘しているが、シュルド王もまたフルトゥルイ信仰の様な一神教の信者であったとすれば、27 行目を含む船葬の場面は、異教の一神教信仰をキリスト教理解に利用したことを示す例と言える。

また、*freā* という語彙自体についてもキリスト教による異教の外面的形態の利用と言えるのではないだろうか？³⁰ 当時の人々（キリスト教化される者と、キリスト教化する者）の語感が 27 行目の *Frean wære* を耳にしたとき、どれ程異教的ニュアンスを感じ取っていたのかは確定的に述べることはできないが、その昔キリスト教化する以前には、*freā* は明らかに異教の神に対して使用されていた。その言葉が、聖職者である著者によってキリスト教の神を意図して使用されるということは、異教の言葉のキリスト教への利用であると言える。

その一方で、キリスト教が異教に対して厳しく禁止した事項もある。その中の一つが、偶像崇拝である。³¹ つまり *Beowulf* 175 行目から描かれている偶像崇拝と、そこに向けられているキリスト教の異教に対する批判的視点（シュルドの人々の崇拝する神を *gastbona* と表

²⁸ *Ibid.* p.71- を参照。

²⁹ *Ibid.* pp.74-75

³⁰ 神を表す言葉のキリスト教への利用については、ミリス pp.48-51 参照。

³¹ キリスト教への改宗者および信者に課せられた禁止項目と義務項目については、ミリス、p.36 を参照。

現する)は、このような「社会のコンテキスト」を反映したものであると考えられる。

このように中世の宗教的背景と照らし合わせてみると、27行目の *Frean wære* を含む船葬の描写(キリスト教による異教的習慣の利用)と、175行目からの *gastbona* を含む偶像崇拜の描写(キリスト教による異教的習慣の禁止・批判)は、共に異教徒の習慣が描かれていながら、中世という「時代のコンテキスト」を反映した非常に対照的な場面であるということが見えてくる。

4. 結論

本稿を通して、175行目からの異教信仰の描写との整合性から、27行目の *Frean wære* は「著者のキリスト教的視点を通して見た神、キリスト教の神の保護のもとへ」を示しているという解釈に至った。異教を信仰する(もしくは、かつて信仰していた)シュルドの人々によってシュルド王は船葬という異教形式の葬儀で弔われた(II.28-52)。もしこの状況が、純粋にシュルドの人々の視点を通して見られていたとしたら、そして彼らがまだキリスト教と接していなかったとすれば、シュルド王が召されたのは確かに異教の神のもとであっただろう。しかし、キリスト教への改宗下という当時の社会的状況を考え合わせると、聖職者である著者のキリスト教的視点を通して見たならば、例え異教を信仰していたシュルディングの王であっても、シュルド王の召される先はキリスト教の神のもとでなければならなかったと考えられる。

Beowulf が口承で成立したとされるのは7～8世紀頃であるが、題材になっているのが5～6世紀のデーン人であることから、口承されていた当初は異教を信仰するデーン人たちの純粋な英雄叙事詩であった可能性は高い。しかし、その *Beowulf* 物語が、11世紀頃に Britain で異教からキリスト教への改宗・布教の過程という「時代のコンテキスト」におかれ、キリスト教の聖職者の手によって *Beowulf* 写本という形に形成された。船葬の様子(II.28ff)や偶像崇拜の様子(II.175-88)が描かれていることから、この物語に登場するシュルドの人々、つまりデーン人たちが異教的文化の中で生活し、異教を信仰する異教徒であったということを著者が認識していた可能性は高い。その上で聖職者である著者は、キリスト教が容認できる異教的要素(船葬、一神教信仰、神を示す言葉などの外面的形態)はそのまま描写して、キリスト教信仰という中身を伝えるために利用する一方、偶像崇拜などキリスト教が禁ずる異教的習慣に関しては批判的視点をもって、*gastbona* のような悪いイメージの言葉を使い厳しい態度で描写したのだと考えられる。信仰に関する描写はあくまでも著者のキリスト教的視点を通して描かれているのである。著者が彼のキリスト教的世界観の中に祖先たちの異教的世界を組み込んで物語り、書き記したものが、写本という形で今日まで存在し続けている *Beowulf* という作品であると言えるのではないだろうか。

Beowulf という作品を通して、我々は異教的要素とキリスト教信仰が融合した写本製作当

時の人々の世界観の一端を見ることができる。*Beowulf* 写本には、Britain が異教信仰からキリスト教信仰へと変遷していった長い時間の、ある一時点を切りとった断面が保存されているのである。そこには、キリスト教への改宗・布教という社会的背景も含まれている。つまり、キリスト教信仰に利用できる船葬などの異教の外面的要素は利用される一方で、偶像崇拜などの排除すべき異教的要素が禁止されていたという当時の社会状況を裏付ける証拠となり得るような描写が、*Beowulf* 写本には見られるのである。それ故、*Beowulf* 写本はキリスト教を布教する際に教本として利用されていた可能性も高い。そのような点で *Beowulf* 写本は文学的のみならず歴史的研究をする上でも重要な文献である。

参考文献

- Bessinger, J.B., and Philip H. Smith. *A Concordance to Beowulf*. N.Y.: Cornell UP, 1969.
 ———. *A Concordance to Anglo-Saxon Poetic Records*. With an Index of Compounds Compiled by Michael W. Twomey. N.Y.: Cornell UP, 1978.
- Bradley, S.A.J. trans. and ed. *Anglo-Saxon Poetry*. London: Everyman, 1995. (Everyman's Library, Reprinted. First Published in Everyman's Library in 1982).
- Bosworth, Joseph, and T. Northcote Toller. *An Anglo-Saxon Dictionary*. Oxford: Oxford UP, 1st ed. 1898, repr. 1973; *Supplement* by T. N. Toller, Oxford: Oxford UP, 1921, repr. 1973, with *Enlarged addenda and corrigenda* by Alistair Campbell, Oxford: Oxford UP, 1972, repr. 1973.
- Chambers, R.W. 'Are the Christian Elements Incompatible with the Rest of the Poem?' *Beowulf: An Introduction to the Study of the Poem with a Discussion of the Stories of Offa and Finn*. with a Supplement by C.L. Wrenn. Cambridge: Cambridge UP, 1959, 121-8.
- Hall, J.R. Clark. *A Consise Anglo-Saxon Dictionary 4th ed.* Toronto: U of Toronto P 1960, repr. 1984, 1988, 1991, 1993, 1996, 2000.
 ———. *Beowulf and the Finnesburg Fragment: A Translation into Modern English Prose*. London: George Allen & Unwin, c1950.
- Jack, George, ed. *Beowulf: A Students Edition*. Oxford: Oxford UP, 1994.
- Klaeber, FR. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Ed with Introduction, Bibliography, Notes, Glossary, and Appendices. 3rd ed. with Supplements. Boston; New York; Chicago; Atlanta; San Francisco; Dallas; London: D.C. Heath, 1922, 1928, 1936, 1941.
 ———. 'The Christian Coloring', Joseph F. Tusso, ed. *Beowulf: The Donaldson Translation, Backgrounds and Sources, Criticism*. New York; London: W.W. Norton, 1975, 102-5.
- ミリス, ルドー 著, 武内信一 訳『異教的中世』新評論. 2002.
- Ong, Walter J. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London; New York: Methuen, 1982.
- 忍足欣四郎 訳『中世イギリス英雄叙事詩: ベーオウルフ』岩波書店. 2004.
- Schneider, Karl. *Sophia Lectures on Beowulf*. Delivered at Sophia University. Ed. by Shoichi Watanabe and Norio Tsuchiya. Tokyo: Taishukan, for the Japan Science Society, 1986.